**“孤軍奮闘!” 2017 07 16**

**マタイ 13: 1-9, 18-23 Pr. H. Adachi**

ある日本神道系の宗教指導者と話をした。なぜ人間は災難にあうのかという話題となった。彼女が教えていることは、過去になにか悪いことをしたり、あるいはその災難にあっている人の先祖が悪いことをしたりした結果として、災難を体験するとのことだった。

因果応報という考え方が多くの宗教の前提になっていることは否めない。キリスト教は、果たして、因果応報を教える宗教なのだろうか？　キリスト教の中でもルター派教会では、よく信仰義認という言葉を使って説明している。

人はそもそも間違いや、神の意思から離れた行い（罪）を避け続けることはありえない。しかし、信仰によって救われ、義人とされる。簡単に言うと、それが信仰義認の意味だ。

天におられる父なる神は徹底的にこの世の人間を愛してくださっており、過去の過ちや罪によって、いわば天罰がくだって災難にあうという問題ではない。

愛のあふれる天の父、創造主が送ってくださった恵み深い主イエス、そして聖霊を救い主と覚える信仰のみによる、赦し・救いがあり、義人とされる。私たちは過ち・失敗を犯すが、それらの肩代わりとなって十字架にかかって死に葬られながらも、復活されるイエスを救い主として仰ぐ信仰により救われる。これは最高の知らせ、福音なのだ。

すべてのキリスト教信仰者は、自分で気づいているかどうかにかかわらず、この最高の良き知らせを、世に広く告げ知らせるべく大きな使命を授かってキリスト者となっている。しかし、最高の知らせ福音の種を、世に広めることは容易ではない。主イエスがこの世に送られたとき、イエスの福音伝道は、宗教指導者たちからたいへんな反発にあった。

そのような状況の中で、イエスは、「種をまく人のたとえ」をとくに反発していた宗教指導者たちに向かって語っているのが、今日の福音書の最初の部分1－9節である。このたとえ話は、さらに弟子たち向けに18節から23節でも、説明つきで繰り返されている。そこでこの説教ではあえて、蒔かれた種が、四つのパターンで、どうなるか、またそれぞれのパターンにどういう意味があるかという話はしないでおきたい。

むしろ、このたとえ話に出てくる種を蒔いている人をよく思い浮かべていただきたい。私はミレーの書いた「種を蒔く人」の絵を、ボストンに住んでいるときに、わざわざボストン美術館の会員となり、何回も見に行った。　そして、その絵の前に座り込んで、何十分も見ていたことがある。

本物とはいいがたいが、その絵が本日の週報の表紙に載っているので、どうか見てほしい。さきほど読んだ福音書の内容を振り返りつつ、じっくりミレーの絵を見てほしい。　私は、ミレーという画家は、なんどもなんども、福音書箇所を読み、この絵を描いたのだと思う。

さらに、ミレーは大きな聖霊の力を帯びて、この絵を描いたのだとも確信している。イエスの語っている状況は、われわれが知る農業に携わる人々が行う種まきの話とは、全然別の次元の話をしている。というのは、農業であればあ、土地を耕し、超えた土地に種を植えるからだ。

しかし、ここで語られているのは、荒れ野のようなところで、種を蒔いてもほとんど芽が出ようもないところに、種を蒔き続けている人である。いったいこの種を蒔いている人はだれなのだろうか？

当時の社会状況は、イエスが次々に不遇な状況や病にある人々を救っていった姿は、律法を大切にしているユダヤの宗教指導者たちには、とても受け入れがたいものだった。　病や災難は、過去の律法を守らなかった結果であると教えていたからだ。

宗教指導者も社会も、過去に罪をおかしたのだから災難や病に耐えなければならないのだ、と因果応報の観点から見ていた。

またイエスの弟子たちだって、どれだけイエスの教えをわかってイエスの従事者となっていたか疑問である。というのは、イエスの死刑判決が出たとたんに、弟子たちは、その場から足り去ってしまったのだから。

そのような環境では、イエス自身がいくら福音の種、すばらしい知らせを実践しようが、社会には厳しい壁があった。そのような背景を理解するとき、 イエスの語った、種を蒔く人の話にでてくる種まき人はまさにイエスご自身の姿に見えてこないだろうか。

つまり、種が芽を出し成長し、多くの実を結ぶなどということはありえないような、条件の悪い土地、道端もあり、石ころだらけ、まだ肥沃な土壌はとても浅くしか存在していない土地に、あきらめずに種を蒔き続けるイエスの姿が、この種まき人には現れている。

そして、現代社会を見てどうだろうか？　日本社会だけではない、アメリカ社会においても、キリストの教えは、かならずしも、蒔いた種が成長しているとは言いがたい。教区のビショップの補佐として、開拓伝道を見てきたがほとんど成功していないといっても過言ではない。

みなさんの中には同意しない方もいるかもしれない。中には伸びている教会があると。たしかに伸びている教会もある。しかし、伸びている教会で教えている教会では、どちらかというと、キリスト教会といいながら、実は、あなたはこれとこれとこれをすれば、救われるのですよ。因果応報的なことばかりを教えていたりする。ルター派教会として、イエスの恵みに奥深く深く頼って、救いに預かる話は、簡単ではない。

それでも、今日のイエスの話から、種を蒔く人のたとえのとおり、あきらめることなく神の国を語り、神の愛を実践し続けるキリスト教会であり、キリスト者でありつづけよう。かならず、三位一体なる神の働きにより30倍、60倍、あるいは100倍もの実を結ぶ時が訪れる。　アーメン